

伊勢物語二十三段「筒井つの」歌の解釈について

水谷 隆

A Study of the waka poem “Tutsuisuno” in the 23rd Dan of *Ise Monogatari*

MIZUTANI Takashi

一、問題の所在

伊勢物語二十三段は次のように始まる。

むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにい
て遊びけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはし
てありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男を
と思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。¹

幼なじみの子どもたちが「おとな」になってからは「恥ぢかはし
て」いたのだけでも、男女ともに相手と一緒にになりたいと思っ
ており、女は親のすすめる他の男との縁談も受け入れないでい

た。そうした男女が、

さて、このとなりの男のもとより、かくなむ。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざ
るまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあ
ぐべき

などいひひて、つひに本意のごとくあひにけり。

という歌の贈答を経て、「本意」の通り結ばれる。

この贈答のうち男の歌は、「結婚への意欲をさりげなく訴えか
けた歌²」と、物語の文脈からして理解できる。ただこの「さりげ

な」さ——「あはむ」「見む」等の直接的な求婚の言葉を用いていないことからそれは首肯されると考えるが——とも評されるところ、すなわち男がどのような態度・ニュアンスで自らの意思を伝えようとしたのかについては、今少し掘り下げて考える余地があると思われる。それは、「まろ」という一人称を、男が用いているからである。

たとえば、森野宗明氏³が

「まろ」に注意。親愛の気持ち、またなれなれしい態度で相手に接するとき用いられる一人称代名詞。和歌・歌謡での例は、古くは「古事記」四十八の歌謡にみえるが、平安時代では「曽丹集」「実方集」「行尊大僧正集」などにわずかに散見する程度。あまりに話し言葉的であり、かつなれなれしい印象が強いので避けられたものか。

と指摘するように、「まろ」が平安時代の和歌に用いられることはまれであり、そのような、まれな表現をしている以上、そこには何らかの特別な意図あるいはニュアンスを読み取るべきと思われるからである。

二、成人男性の用いる「まろ」

すでに指摘されているように、一人称の「まろ」は「中古の文

献では、老幼男女、貴賤にかかわらず、広く用いられ」（日本国語大辞典 第二版）、また、「用例はほとんど会話文中に見え、気を遣わなくてよい親しい相手と話すときに使用する場合が多い」（古典基礎語辞典）ものである。ところで、どのような人物を「気を遣わなくてよい親しい相手」と認識するかは、発話者の属性によって一定の傾向があるものと思われる。たとえば発話者が幼児である場合、そもそも気を遣わなければならないような相手と会話をする場面自体が一般的に考えて限られるだろうし、だからこそ幼児が発話主体の場合には「まろ、この歌の返しせむ」（土佐日記一月七日条）など、その多くが相手に対して気を遣わない、まさに無邪気な発話中の一人称として描かれることになるだろう。それに対して発話主体が成人の場合、対人関係において気を遣いながら会話しなければならない場面が相当の割合を占めると思われる。そのように考えれば、平安時代の作品中で、成人の用いる一人称は「われ」が大多数であり、「まろ」の割合の少ないことにも合点がいく。

このことを要するに、成人が「まろ」を用いるのは、気の置けない相手との、気の置けない等、何らかの条件下での会話に限定されるのだということである。実際、たとえば、源氏物語の玉鬘巻で末摘花の歌を見た源氏が紫上に對して、

古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへる、さかしらにもてわづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。「古代

の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。」(玉鬘⁴)

のように「まろ」と自称しているのだが、そのすこし後の場面では同じ紫上に対して

夕つ方、御方々の参座したまはんとて、心ことに引きつくりひ、化粧じたまふ御影こそ、げに見るかひあめれ。「今朝この人々の戯れかはしつる、いとうらやましく見えつるを、上には我⁵見せたてまつらん」とて、乱れたることどもすこしうちまぜつつ祝ひきこえたまふ。(初音)

のように、「われ」という一人称を用いている。この二つの場面の間で源氏と紫上との関係に変化があったとは読み取れないことから、やはり、成人が「まろ」と自称するのは、発話の対象が「気を遣わなくてよい親しい相手」であることは必要条件であるにしても、それだけで十分条件とは言えないことが了解される。では、どのような場合に「まろ」と言うのか。

ここで源氏物語の花宴巻の例を示したい。

宴の後、酔った源氏は弘徽殿の細殿で朧月夜のもとに忍び込み、その袖を捉える。

女おそろしと思へる気色にて、「あなむくつけ。こは誰ぞ」

とのたまへど「何かうとましき」とて

深き夜のあはれを知るも

入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱き降ろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく(女)「ここに、人」とのたまへど、

恐ろしさにわななきながら、人を呼ぼうとする女に対して源氏は、

まろは、皆人にゆるされたれば、召し寄せたりとも、なんでもふことから。ただ忍びてこそ。(花宴)

と言う。酒のためか、朧月夜に対して何らの気も遣っていない体であることは勿論であるが、この言葉には源氏の傲慢さ、あるいは優位性を顕示しようとする意思が感じられる。その文脈で「まろ」という一人称が用いられているのである。またたとえば、夕顔を連れ出した廢屋で物の怪に襲われ、「女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥したり」という状況で、内心は怯えながらも強がる源氏の発した

こはなぞ、あなものの狂ほしもの怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのものの人おびやかさんとて、け恐ろしう思はする

ならん。まろあれば、さやうのものにはおどされじ。(夕顔)

という言葉も、己の優位性を示すことで、女君たちを落ち着かせようとすると同時に自らを奮い立たせようとするものだろう。

さらに、胡蝶巻で、玉鬘へ男たちから寄せられた懸想文をみながら、彼らの評価を彼女に語る源氏の言葉、

かうざまのことは、親などにも、さはやかに、わが思ふさまとて、語り出でがたきことなれど、さばかりの御齡にもあらず。今はなどか何ごとをも、御心に分いたまはざらむ。まろを、昔ざまになすらへて、母君と思ひないたまへ。(胡蝶)

も、玉鬘に対して、親代わりという自身の立場の優位性を示し、その言葉に従うよう圧迫しているものと思われるし、女三宮に贈られてきた朱雀院の手紙を見た源氏の

この御返りをばいかが聞こえたまふ。心苦しき御消息に、まろこそいと苦しけれ。(若菜下)

という言葉も、心幼い妻に対して教諭するような庇護者、すなわち優位の立場にある者としての振るまいのあらわれだろう。

このような「まろ」の使用例は光源氏の発話に限らない。落葉宮の母御息所の手紙を雲居雁が見つつけて隠し、夫である夕霧に不

満を述べる。それに対して夕霧は次のように言う。

にはかと思すばかりには何ごとか見ゆらむ。いとうたてある御心の隈かな。よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき。あやしう、もとよりまろをばゆるさぬぞかし。なほかの緑の袖のなごり、侮らはしきのことつけて…(夕霧)

夕霧の言葉の背景には、「夕霧が六位の時、大輔の乳母が、「めでたくも、もののはじめの六位宿世よ」とさげすんだこと。夕霧はこの言葉に自尊心を傷つけられ、何度か思い出しては悔しがっている。」という事情があった。そのような、トラウマのような思いから自尊心を守るために、言い換えると自分のプライドを再確認するために「まろ」と発したのがこの場面だったのではないか。

また、宇治八宮と親しくなった薫が、宇治から帰京後、匂宮の好色心をあおろうとして、大君のことを語った場面

例の、さまざまなる御物語聞こえかはしたまふついでに、宇治の宮のこと語り出でて、見し暁のありさまなどくはしく聞こえたまふに、宮いと切にをかしと思ひたり。さればよと御気色を見て、いとど御心動きぬべく言ひつづけたまふ。

で、匂宮が薫に返した言葉

「さて、そのありけん返り事は、なか見せたまはざりし。まろならましかば」と恨みたまふ。(橘姫)

も、薫に対して恋愛関係における優位性を示そうとする思いからのものと考えられるだろう。同様に、玉鬘から「まめ人」と言われた薫が、その名を嫌がり「すき者」として振る舞おうと玉鬘の屋敷を訪れた場面では、

侍従の君、まめ人の名をうれたしと思ひければ、二十余日のころ、梅の花盛りなるに、にはひ少なげにとりなされじ、すき者ならはむかしと思して、藤侍従の御もとにおはしたり。

そこに、いわば恋のライバルとなる蔵人少将がたたずんでいるのを見つけ、自分を案内せよと言う。

中門入りたまふほどに、同じ直衣姿なる人立てりけり。隠れなむと思ひけるをひきとどめたれば、この常に立ちわづらふ少将なりけり。寝殿の西面に琵琶、箏の琴の声するに心をまどはして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬこと思ひはじめむは罪深かるべきわざかな、と思ふ。琴の声もやみぬれば「いざ、しるべしたまへ。まろはいとたどとし」(竹河)

この「いざ、しるべしたまへ」云々も、ライバルよりも優位に立

とうとする心情を背後に読み取るべきと思われる。

先に示した、紫上に対する源氏の「われ」と「まろ」の使い分けも「すべて女は、たてて好めること設けてしみぬるは、さまよからぬことなり。」(玉鬘)と考える源氏が、自らは深く学んだ和歌のことについて女である紫上に語る際ににじみ出た優越感の現れとして、「われ」という一人称を使用したのだと理解できるだろう。

他の例は省くが、およそ成人男性が「まろ」と自称するときには、森野氏の言う「なれなれしさ」に加えて、自らの優位性を示したいという思いが読み取れるようである。また、本稿では源氏物語の例のみを示したが、「中世以降、臣下は用いなくなる」(古語大辞典)ことは、「まろ」によって表示される自己の優位性のニュアンスによるものと考えて合点がいくのではないか。

三、「筒井つの」歌を贈った男の心理的状況 —「恥づ」について

では、本稿で問題としている「筒井つの」歌の場合はどうか。

伊勢物語は歌主である男について「おとなになりにければ」と述べているのだから、この歌は、成人男性のことばとして読み取ることが求められている。しかし問題は、この歌の「まろ」を、右に見た、成人男性が自らの優位性を示そうとする気持ちのあらわれと読み取ることが適当とは思われないことである。次にその

ことについて述べる。

この物語の主人公である幼なじみの男女は、「大人」になってからは、「恥ぢかはして」いたと記される。この「恥ぢかは」すことがどのようなことを意味するのか、伊勢物語諸注のほとんどは「たがいに恥じあうことをいう。年ごろのさまである。」(新日本古典文学全集)のように説く。しかし、何をなぜ「恥」ずのかについての説明はあまりなされない。たとえば、石田穰二氏は

「はづ」は、恥ずかしがる。ここは、恥ずかしがつて顔を合
わせないようにすること。『源氏物語』の例によると「いみ
じう思ひかはして、けざやかには今も恥ぢきこえ給はず」
(少女)は、雲居の雁の夕霧への態度、「ことに恥ぢなどもし
給はず」(若菜上)は、女三の宮が源氏に対して、「あきらか
なる火影をさすがに恥ぢたまへるさま」(横笛)、これは雲居
の雁が夫の夕霧に対しての場合、これらと同様の使い方であ
る。

と、恋人間あるいは夫婦間であっても女が男に直接顔を見せるこ
とを憚る描写を、当該章段の類例としてあげる。それはそのとお
りであるが、やはり、なぜ妻が夫と顔を合わせないようにする
のかということについての説明はなされない。

伊勢物語中には、恋人あるいは夫婦関係にある者の間で「恥
づ」という状況が描かれたものとして次の例が見いだせる。

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づか
し、聞えねば苦し」と書いて、うはがきに、「むさしあぶみ」
と書いて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より、
女、

武蔵鎧さすがにかけて頼むには

問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鎧かかるをりにや人は死ぬらむ

(十三段)

この「恥づかし」は、契沖が「京にちぎりおきし人に、さること
有身なれば、おとづれきこえせんも思はんずる所はづかしく」
(勢語臆断)と言うように、妻が、浮気をした自分のことをどの
ように思うかを考えたときに抱く、後ろ暗さの表現であるだろ
う。

また、古今和歌集に収められた伊勢の歌

夢にだに見ゆとは見えじ

あさなあさなわがおもかけにはづる身なれば

(古今和歌集 恋四 六八二)

の「恥づ」は、一首全体の解釈は難しいものの、古今和歌集両度

聞書が「我が面影にはづるとは、朝、鏡に向ひて見るに、衰へたる我が影にも恥づかしと思へば、たとへ人の夢に見ゆとも、我は見ゆるとは見えじと云ふ心にや。」というように、恋にやつれ衰えた自分の顔を思う相手に見せるのはみつともないという感情を表したものと解すべきだろう。また、

わすられて思ふなげきのしげるをや

身をはづかしのもりといふらん

(後撰和歌集 恋二 664)

の「恥づかし」は、恋人に捨てられて嘆く我が身のことを情けないと感じてのものであろう。

このような、男女関係においてある人物が「恥づかし」という例はさほど多くは見いだせないものの、いずれも自らの状況を問題のあるものと認識し、相手に対して引け目を感じているものである。…そもそも「恥づ」は、「過ち、欠点、罪などを悟って面目なく思う。」(日本国語大辞典 第二版)という感情を抱くことであつたのである。

石田氏の示した源氏物語の例にしても、幼い雲居雁や女三宮は夫に対して感じるべき、足りないところのあるだろう自らの姿をさらすことへの引け目というものを未だ知らない、と描写されているのだらうし、後の雲居雁は夫に対して自らの容姿に引け目を感じる、つつましかな大人になったのである。

以上のように考えると、当該の伊勢物語二十三段でも、男女が互いに恋心をいだきつつも、それぞれが自分の不足を引け目と感じ、相手に対して面目ないと思つてゐるという状況を「恥ぢかはして」と述べてゐるのだと判断できよう。そのような状況下で男が勇気をふるつて贈つた歌に用いられた一人称に、自らの優位性を示すニュアンスがあるというのでは、どうにも無理が感じられるのである。

四、「恥」づという状況下で女を

「妹」と言ふことについて

もう一点、伊勢物語二十三段の男女が「恥ぢかは」していた、という状況とは整合しがたい言葉に「妹」がある。

「妹」という語は、「結婚が成立した状態、もしくは結婚に至つていなくても当事者どうしの合意が必要である。」(古典基礎語辞典)と指摘されるように、男女関係においては愛し合う女性に対して親しみをこめて用いるものであり、その思いがいまだ通じあつていない段階では、

妹と言はば なめし畏し

しかしがに 懸けまく欲しき 言にあるかも

(万葉集¹⁰ 十二 二九一五 正述心緒)

のように、口にすることが憚られる表現だったとおぼしい。そのような、思いをかわした恋人間で交わすべき言葉を用いたと見る時、「筒井つの」の歌についても「妹とは領じたる心にいへり」(勢語臆断)のように理解することになる。しかしこのように捉えてしまうと、自分のことを「恥」じ、その引け目のために愛情表現すらしたことの無い段階の男の心情表現として、やはり不自然さを感じざるを得ない。

以上、伊勢物語二十三段の「筒井つの」歌について、

①「まろ」を成人男性が用いる場合には優位性の表示のニュアンスがある。

②男女が「恥ぢかはす」と述べられている以上、男も自らのありように何らかの引け目を感じているはず。そのことと優位性の表示とは矛盾するだろう。

③「筒井つの」歌を贈った時点ではまだ男女の恋人関係は成立していない。その際に「妹」というのはやはり不自然である。ということを描した。

では、この矛盾や不自然さについてどのように考えればよいのか。

五、伊勢物語二十三段「筒井つの」歌の解釈私案

右に確認した問題点については、たとえば、竹岡氏の解釈

幼年期を過ぎて、そろそろ、おとなの世界に興味関心を持ち始めた思春期初期の、まだ井筒の高さを越えたかどうか「：けらし」と言わねばならぬような背丈の少年が、おとなの求愛の歌をまねて詠んだのだが、自称には幼年期、幼な馴染と井戸端で遊んでいた時に、使い慣れていた口語「まろ」をそのまま和歌の中に用い、相手の女をわが妻気どりで称するにどう呼んでよいか分からず、古風な上代語の「妹」を用いたりして、このような求愛行動などには全くうぶな口つきが、そのまま歌に出ていて、ほほえましい¹¹。

のように、男を未成熟な少年と見れば、この歌の「まろ」は子どもが無邪気な一人称であり、そこに優位性云々を持ち出す必要はなくなる。結果として②の、男女が「恥ぢかはす」状態であったこととの不整合は解消する。しかし、単に、男はまだ少年だったのだと解すだけでは「おとなになりにければ」という記述との間に別の矛盾が生じてしまう。ならば、男は「大人」でありながら、あえて子どものような口調で一首を仕立てた、と考えてみてはどうか。それが本稿の提示する仮説である。

この仮説の根拠としたいのは、「すぎにけらしな」という表現である。これは男女が共に遊んでいた幼少期に背比べをしていた井筒の高さを、男が「わたしの背丈は、もう井筒を超えたようだ」と推定しているものだが、考えてみるとこれは非合理的な言いようである。文芸の世界に現実の話を持ち込んで論じることが

君ならずしてたれかあぐべき

はどのように理解できるだろうか。

この歌については、早くから「女の髪を夫のあげゆふ事やはある」(伊勢物語新釈)ことが問題とされている。そのため、「あなたでなくして誰が私の髪をあげることができるでしょう」という下の句は、物語の文脈上、男の求愛に応じるメッセージになっているにちがいないことは理解できるのだが、どのような理屈でもって、そう理解することになるのかということについては説が分かれている。大まかには、「(夫と思ひ定めた)あなたのため以外に誰のために髪上げをしようか」¹⁶などのように、何らかの言葉を補って解釈する方向と、「これが結婚を前提とするところから、ほかの誰でもないあなたと結婚したいという気持ちを託した」¹⁷などのように、遠回しな意思表示と見る方向とがある。本稿でそこに何らかの新見解を加えることはできないが、ただ、この歌の表現が、言葉を補うにせよ裏に真意を託したものであるにせよ、一首が直接的ではない、遠回しな言葉遣いになっていること自体に注目したい。つまり、女の真意の読み取りにくい表現は、今回述べてきたような、男の歌が遠回しで遠慮がちの、メッセージをどう受け取るかの判断を相手に委ねるようなものであったところに呼応するものとして受け取るべきだろう、と考えたいのである。

繰り返しになるが、男女が「恥ぢかはして」いたと記されている以上、女も男を慕いながらも、自らのありようを男には釣り合

わぬものと考えていたことになる。そのように思う女のところ
に、男から幼時の会話を装った遠慮がちの求愛の歌が届いた。そ
れに対して女も「振り分け髪」を比べていたという幼時のエピソードで応える。また、男が、背丈が井筒の高さを超えたようだと口にするので結婚可能な大人になったと控えめに伝えたのに対して、髪上げを話題にすることで、自分も大人の女になった、と遠回しに応じた。そのような贈答としてこの二首を捉えたいと思う。

この時代の男女の歌の贈答は、「歌のいどみ」(源氏物語 玉鬘)とも理解されていた。たとえば、伊勢物語においても

むかし、男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすが
なりけるがもとに、いひやりける。

秋の野にささわけし朝の袖よりも

あはで寝る夜ぞひぢまさりける

色好みな女、返し、

みるめなきわが身をうらとしらねばや

離れなで海人の足たゆく来る (二十五段)

むかし、男、みそかに語らふわざもせざりければ、いづく
なりけむ、あやしきによめる。

吹く風にわが身をなさば

玉すだれひま求めつつ入るべきものを

返し、

とりとめぬ風にはありとも

玉すだれたが許さばかひま求むべき (六十四段)

など、いかにも挑発し合う男女の贈答歌が描かれる。今回取り上げた二十三段の贈答歌も、遠慮がちで遠回しな、メッセージの理解を受け手に委ねるような男の歌に対して、やはり遠回しのわかりにくい表現で応えた、一種の「いどみ」として考えてみたい。

注

1 伊勢物語の本文は、新編日本古典文学全集による。

2 鈴木日出男『伊勢物語評解』(筑摩書房 二〇一三年)

3 森野宗明『伊勢物語』(講談社文庫 一九七二年)

4 源氏物語の本文は新編日本古典文学全集による。

5 新編日本古典文学全集頭注

6 注3に同じ。

7 この想定が和歌においても当てはまるかどうか論じたいところではあるが、現在確認できる和歌の用例は

夏草のしげみにおふるまろこすげ

まろがまろねよくよへぬらん

(拾遺和歌集 恋三 八二九 題知らず)

ある女にふみやる、返事はせで、あげまきをむすびておこせ

たれば

ひろばかりさかりてまろとまろねせむ

そのあげまきのしるしありやと

(実方集 一四五)

などのように、言葉遊びを主目的としたものであるか、あるいは詞

書がないために自称する歌主の具体像と人間関係が分からないものであり、いずれも成人男性の用いる「まろ」の有するニュアンスについて考察するための材料とはしがたい。

8 石田穰二『伊勢物語注釈稿』(竹林舎 二〇〇四年)

9 和歌の本文は断らない限り新編国歌大観による。

10 万葉集の本文は伊藤博『万葉集釈』による。

11 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(右文書院 一九八七年)

12 大阪城豊臣石垣公開プロジェクトホームページ (<https://www.loyotom-i-shingaki.com/hideyoshi/1812.html> 2024. 9. 18 確認)

13 文部科学省ホームページ (https://www.mext.go.jp/content/20231115-mx-lchousa01-000031879_1a.pdf 2024. 9. 18 確認)

14 平本嘉助「骨からみた日本人の身長の変り変わり」考古学ジャーナル 199 (六一書房 一九八二年)

また「eStat 政府統計の総合窓口」によると、二〇一七年時点での

二十歳日本人男性の平均身長は一七・九 cm という。 (<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003224930> 2024. 9. 18 確認)

15 清少納言と橘則光が「いもうとせうと」と呼ばれていたという枕草子のエピソードも、一説として言われるように、二人の離婚後のことであるならば、きょうだいでも夫婦でもないけれども親しい男女間で、「いもせ」あるいは「いもうとせうと」という、きょうだいに

なぞらえた呼称を用いることがあったという可能性を示唆する。

16 日本古典文学大系『伊勢物語』(岩波書店 一九五七年)

17 石田穰二『新版伊勢物語』(角川文庫 一九八七年)